

超攻撃型魔法少女の絞め技・言葉責め・辜丸責めで身も心もズタボロにされた

目次

1	紫苑 vs 怪人	2
2	体育倉庫にて郷田と	37
3	屋上にてタケルと	66
4	体育倉庫にて2回戦目	96
5	休日デート	124
	あとがき	145

1 紫苑 vs 怪人

20XX 年、チキユウ。

この星では、秘密裏に魔法の力を扱う『魔法少女』が怪人と戦っていた。舞台はニホンという国の、とある国立学校である。

この学校には18〜20歳の男女が通っている。

現在、季節は秋。

放課後の夜に、校舎裏に出現した人型の怪人。

その怪人と対峙している美女が魔法少女に変身する。

「また出たわね、怪人！ 変身……！！」

この女性の名前は【紫苑（しおん）】。

国が選んだ魔法少女の1人である。

この国立学校の最上級生であり、生徒会の副会長を務めている。

生徒会の仕事を終えたところに怪人の出現を感知し駆け付けた。

彼女は副会長であるにもかかわらず、銀髪のセミロングという派手な髪型だ。

顔に施したメイクもギャルメイクである。

制服は着崩しており、ネクタイに至っては学校の指定外である紫色のものを巻いている。

紫苑は171センチという高身長であり、モデルのような細い体型で美白。

高い鼻にキリっとした眉毛、鋭い目つきの銀髪美人ギャルである。

そして特筆すべき点は、弾力のあるFカップの巨乳だ。

その非の打ちどころがない完璧なルックスは、生徒だろうと教師だろうと、日頃から男の視線を引きつけていた。

そんな美貌をもち、副会長という高い立場である彼女から放たれる鋭い目つきに射抜かれたら、男女問わず彼女に萎縮してしまう。

「私が相手だと、あなたは苦しみながら負けることになるわよ？ 覚悟しなさい……！」
☆輝
き☆ゆらめき☆マジカルステップ☆」

紫苑がセミロングの銀髪を揺らし、踊りながら変身する。

全身が光に包まれて、彼女が羽織っていた紺色のブレザーが消えた。

その神秘的な股間と妖艶なフトモモを隠すチェック柄のミニスカートも消えていく。

校則違反の紫色のネクタイも、長袖の白いYシャツも、レース付きの紫色のブラジャーとパ
ンツも、ギャル感を出していた白いルーズソックスも消えていった。

それと同時に彼女のカラダを包み込んだものは紫色を基調とした派手なミニドレス。

履いていたローファームも消えて、オシャレな紫色のヒールに変わっていた。

派手さに磨きが掛かった今の姿こそが、【魔法少女・紫苑】である。

（ま、まさか……紫苑さんが魔法少女だったなんて……！）

紫苑の変身シーンを目撃して驚いているのは、紫苑のクラスメイトの内気な男、【タケル】。

予備校の帰り道、裏道を通る途中で校舎裏の光景が目に入ってしまった。

道路の物陰に隠れて息を潜めながら、目を見開き絶句している。

紫苑が高速で踊りながら変身する姿を見つめていたタケル。

とてもエロいカラダをもつ彼女の立ち姿や佇まい、所作の隅々まで凝視してしまう。その美しさに見惚れ、彼女の妖艶なカラダを目に焼きつけていた。

「変身完了☆ ……さあ、いくわよ！」

「マホウショウジョ……イバショを突き止めたゾ」

カタコトの言葉で紫苑に話しかける怪人。

坊主頭の彼は上半身が裸で、下半身には黒いスパッツのようなものを身につけていた。その肌は日焼けしているような褐色である。

身長は170センチほどで紫苑とあまり変わらないが、彼女がヒールを履いている分、裸足の怪人は見下ろされている形だ。

しかし、その体は鍛え上げられており、褐色の筋肉を見せていた。

「へえ……喋るタイプなのね？ 少しは楽しませてくれそう」

喋るタイプの怪人は、彼らの中で地位が高く、戦闘力も高い。

怪人が実力者だからか、笑みを浮かべながら対峙している紫苑。

「チキユウ人ごときが、このオレ様に勝とうナド……身のホドを知らないようだな」

「……はあっ？」

カチンときて、怪人に詰め寄る紫苑。

彼女のギャル系のメイクは、変身したことにより高貴なメイクに変わっていた。

もともとのパサつきの残る髪質、そしてナチュラルにクセがつくようにセットした銀髪にも変化があった。

その髪質が艶々になるとともに長さを増して、ロングのストレートヘアに変化している。

ただし、毛先が少しカールしており、派手さを残していた。

耳には派手なシルバーのイヤリングが取り付けられており、煌びやかになっている。

まるで王女のような雰囲気だ。

圧倒的に麗しい姿になった魔法少女・紫苑。

「うっ……!!？」

威勢がよかった怪人は、彼女が近づくにつれて、その雰囲気徐徐に吞まれてしまう。

美的感覚や性的感覚についても、人と怪人であまり変わらない。

紫苑の美しさに目を奪われてしまう。

高貴なメイクが施された鋭い目でニラみながら、怪人の真正面に立った紫苑。

その隙のないオーラを感じ、怪人は迂闊に動けない。

強者であるがゆえに、紫苑の実力を理解してしまった。

彼は、見惚れてしまっていた自分の意識を振り払い、彼女の強さに警戒するよう努める。

「ぐギャあっ!?!」

紫苑から高速のビンタが放たれた。

その長い指から成る美しい手の平で、綺麗なフォームのビンタを放ったのだ。

魔法少女の中でも、運動神経がズバ抜けている紫苑。

ビンタ後の姿も美しい。

「が……ガガアッ……!?!」

怪人は筋肉質だが、身長は紫苑よりやや低い。

モデルのような紫苑は手足が長く、リーチがある。

ビンタする美しい姿を認識することはできたが、全く避けられずに直撃を許してしまった怪人。

強い衝撃に遅れて、頬に痛みが走る。

「今のビンタ……反応できなかったのかしら？　なんだかキミ、思ってたよりシヨボい怪人ね」

あまりの衝撃に頭がクラクラしている怪人。

そんな彼には構わず、容赦なく次の攻撃に移る紫苑。

その場で激しく動き、敵に向かって放たれたのは右のボディ。

彼女が着ているのは艶々した高級な生地で作られたミニドレス。

その中に潜む艶かしいカラダを無駄なく動かし、洗練されたパンチを繰り出す。

「グボォッ!?!」

よろめき、腹を抑えながら後退りする怪人。

俯く敵の頭部を、その白く綺麗な両手でつかむ紫苑。

彼の顔をムリヤリ自分のほうに向け、目を合わせてニヤリと笑う。

その美形の顔が放つ笑みは嗜虐的だった。

笑いながら怪人の腹部に放たれる、右の膝蹴り。

紫で彩られたドレスの短いスカート部分から伸びる美しいフトモモ、膝、ふくらはぎ。

瑞々しく白い肌が輝いている。

そんな綺麗な右脚からは想像できないほど強烈な膝蹴りが放たれた。

折り畳まれた白く長い脚。

紫苑の膝が的確に怪人のみぞおちをとらえた。

「げほあああっ——!?!」

戦闘力が高いはずの怪人に食らわせたビンタとボディブロー、そして膝蹴り。己の肉体を使って強力な技を放ち、怪人を痛めつける紫苑。

（ぶ、物理攻撃……!?! 魔法少女なのに……）

その超攻撃的な戦闘スタイルを目の当たりにして、さらに驚くクラスメイト。なぜか、その光景を見て自身の股間が熱くなるのを感じていた。

「まだまだ終わらないわよ？」

未だに怪人の顔を両手でつかみ続ける紫苑。

続け様に放たれた膝蹴り。

「グふウうつ!?!」

「どう？ 苦しい？ 痛い？」

連続でみぞおちを攻撃されたことにより、息ができない怪人。

怪人は呻きながら、そのまま腰を落としてしまう。

たまらず膝をつき、続いて両手を地面につく。

「うううっ……グうううっ……」

そのまま地面を見つめながら、苦しそうに呻くことしかできない怪人。

その美貌と細いカラダからは考えられない、紫苑の暴力。

怪人が受けたダメージは腹部やみぞおちだけではない。

的確なビンタにより顔面に走った痛みと衝撃も残っており、クラクラしてしまっている。

「ふふっ。その程度なのね」

何もできない敵に対して笑ってしまう紫苑。

立てずに苦しむ怪人をニヤニヤしながら見下ろしている。

「……ねえ、どんな気分？ あなたは怪人の中では強いよね？ 部下とかいるのかしら？
せつかく喋る知能があるんだから、今の気分を聞かせてよw」

「こ、このオンナめッ……!!」

呼吸を取り戻した怪人。

挑発する紫苑に怒るが、彼は膝をついたまま動けない。

「ぷっw 怒りに満ちた、いい表情ね♡」

動けない怪人を見下ろしながら、堂々としたウォーキングでゆっくりと怪人の後ろにまわる紫苑。

怪人は彼女の動きを目で追うこともできないほど、ダメージを受けていた。

「……でも、何もできない♡」

そのまま後ろから抱きつく紫苑。

膝をつき、下を向いて苦しんでいる怪人の首に彼女の細くて長い腕が巻きつく。

それと同時に、紫苑の高貴な甘い香りが漂ってくる。

「隙だらけー♪ 私、今の気分を聞かせて……って言ったよね？ ぜんぜん答えないなんて、ダメな怪人ね♪」

楽しそうに、両腕に力を込めて首を絞める。

「うぐうつ!? ぐぎやぎやぎやつ!?!」

そのまま首を絞め上げる紫苑。

紫色のミニドレスはノースリーブのタイプであり、紫苑の腕が直接的に巻きついている。

徐々に力を込め、彼女のバックチョークが完璧に入った。

ダメージが残っている怪人はなんの抵抗もできず、あっけなく技を掛けられてしまった。

(……えっ!? 今度は絞め技!?)

道路からその光景を覗き込んでいるクラスメイトのタケルが再び驚く。

ネットに流れる魔法少女の情報とは異なり、彼女は魔法を使わない。

完全に怪人の首をロックしており、どんどん締め上げていく。

あまりの苦しさに、地面に座り込んでしまった怪人。

紫苑もまた座り込み、その長くて細い腕に力を込める。

楽しそうな表情で怪人の様子を後ろから観察している紫苑。

「ふふっ。苦しそうね? 意気揚々と乗り込んできた怪人をイジめるのは、楽しくてやめられないわ♪」

笑いながら、紫苑がつぶやいていた。

その姿は明らかに楽しんでいる様子なので、彼女の本性に違いないと思うタケル。可憐な魔法少女の姿からは想像できないほど、容赦ない力で彼の首を絞めている。圧倒的な暴力で怪人を蹂躪しているのだ。

「ああ♡ 楽しい楽しい♡」

「う……うぐうっ……あ……がはあっ!?!」

これまで以上の力で腕に力を込める紫苑。

怪人はバタバタと手足を動かして必死に抵抗している。

（あ……あんなに……容赦なく……）

必死にもがく怪人の様子を物陰から凝視しているタケル。

（じゅ、蹂躪している……）

美しく高貴な姿の魔法少女・紫苑が怪人を容赦なく追い込む姿に見惚れてしまい、全く目が離せない。

彼のペニスは硬くなっていた。

タケルが紫苑に性的な魅力を感じてしまっているのは間違いない。

「……抵抗しても、全く抜け出せないようね？　ちゃんと鍛えているのかしら？」

怪人は両手で紫苑の腕をつかむ。

しかし、その力強く巻きつく腕を首から剥がすことはできない。

薄れていく怪人の意識。

視界に映るのは学校の景色だけ。

どんなに抵抗しても、後ろにいる魔法少女には何の影響も与えられない。

漂う紫苑の甘い香りを嗅ぎながら、徐々に力が抜けていく怪人。

もはや視線が定まらなくなってきた。

頸動脈が圧迫され、次第に意識が遠のいていく。

「ぷっw もう動かなくなってきた♡ 弱い弱い♡ 立場が高いはずの怪人なのに弱いw」

嗜虐的な表情を浮かべ、怪人の無様な姿を後ろから見つめる紫苑。

罵倒しながら明らかに楽しんでいる。

（はぁっ……はぁっ……）

その光景を見ながら興奮するタケル。

パープルカラーの魔法少女が自らの肉体を使って怪人を容赦なくズタボロにしている。

笑みを浮かべながら、バックチョークをかけ続けている紫苑。

やがて一点を見つめたまま、動かなくなった怪人。

紫苑は依然として、楽しそうに笑っている。

「人間を拐うんじゃないの？ 侵略したいの？ それなら、もっとがんばらないとw」
行方不明者が絶えないこの世界。

その実行犯は、異世界の住人と言われている怪人だ。

それを防ぐのが魔法少女の目的ではあるが、紫苑にとってはあまり関係ない。

ただただ容赦なく、怪人を暴力で蹂躪することで快楽を貪っているだけだ。

「グ……グウウ……ウウウッ……」

「それにしても、ぜんぜん喋らないのね？ せっかく喋れるのに、あなたのつらい気持ちをぜんぜん聞けないわw」

「……」

「もう完全に落としちゃおうかな♡ 私次第で、キミの運命は決まるねw」
首を絞めながら、楽しそうに喋りかける紫苑。

「……」

「ノーリアクション？ ふふっ♡ ……遊んでないで、もっとしつかり退治しないとダメね。こ

の世界の平和のために……♪」

ジワジワと攻めてイジメたい欲求を抑え、自分の使命を果たそうとする紫苑。
しかし、その表情は相変わらず嬉々としている。

「それっ♡」

後ろから密着して笑っている美しき魔法少女が完全に落としかかる。
一点を見つめていた怪人は、やがてビクビクと体を痙攣させ始めた。

「あ♡ いい感じ♡」

その痙攣する姿に恍惚の表情を浮かべる紫苑。

すぐに怪人はヨダレを垂らし始め、白目を向いてしまった。

ついには失禁し始めた。

「うわ w 漏れてんじゃん w」

大きな笑い声を上げる紫苑。

獲物が失神している様子を見て、なおさら腕に力が入る。

怪人を蹴ることがやめられない。

これが彼女の本性だ。